

# 失はれたる農村の樂園

南 亮 三 郎

## 一、シスモンデイの描寫した

### 「農村の幸福」

太初に農村の樂園があつたかどうかを私は知らない。が十九世紀の前半、當時最も傑出したる經濟學者の一人とされてゐたシモンド・ド・シスモンデイは獨立小農民の幸福な生活狀態——農村の樂園を、いとも精彩ある筆致をもつて次のやうに描寫した。

失はれたる農村の樂園

農村の幸福——その姿をイタリア・ギリシアの歴史が吾々に示してゐる——は今世紀においてもまた見當らない譯ではない。農民的土地所有の存するところどこにでも、かの幸福・かの確固さ・將來に對するかの信頼・かの獨立性を見受ける。それらは同時に幸福と青春とを保證するものである。その子供達と共に全勞働を自分の小さな相續地で果す農民、小作料を上長の何人にも支拂はず・また賃銀を下級の

何人にも支拂はない農民、その生産を自からの消費の必要に従つて行ふ農民、自分の穀物を食べ・自分の葡萄酒を飲み・自分の栽培した麻と自分のとりあげた羊毛とを着る農民、彼等は市場價格に少しも煩はされない。何故ならば農民には賣るものも買ふものもないからであり、従つて農民は決して商業恐慌によつて破滅することがない。將來を危惧するどころか、將來の期待で美化する、何故と云ふに彼は、一定労働の要求しないあらゆる瞬間を自分の子供のために、否、子々孫々のために費すから。一世紀の後には大木となるやうな種を地中に蒔く時間は彼れにとつて何等時間ではなく、その田畑を絶えず灌漑する溝をつくるにしろ、水源に通ずる堀をひくにしろ、倦まずたゆまず寸暇を偷んで自分の周囲のあらゆる種類の家畜及び植物を改良するにしろ、皆その時間は彼れにとつて時間でないのだ。彼れの小さい遺産こそは眞の貯蓄銀行であり、それは常に、あら

ゆる小収益を貯蓄し・あらゆる閑暇を利用する準備をしてゐる。不斷にはたらく自然の力はそれを實らし、それを百倍にもする。農民は最も活々と彼れの所有と結びつく幸福を享けてゐる<sup>(1)</sup>。

獨立小農民・自作農民の幸福についてのこの描寫はカール・カウツキーがその前半生の傑作『農業問題』にこれを掲げて云ふやうに<sup>(2)</sup>、あまりにも薔薇色に着色されてゐるかも知れない、それはまた農民の一般的狀態の描寫でもなかつた。シスモンディはこの場合主として、彼れの故郷たるスキス及び上部イタリアの限られた若干地方を眼中に置いてゐたのである。事實において農民の一般的狀態は當時、限られたるこれらの若干地方を除いては、「農村の幸福」として語らるべく餘りにもかけ離れてゐた。年代上の若干の隔たりはあるが、たとへばドイツを見よ。そこではなるほど、フリードリツヒ二世（在位一二二〇—五〇年）の「善政」によつて農民には初めて所有權が確保され、殊にシュレ

ジーンの征服後、彼等は地主に小屋や穀倉の再建を行はしめ、農民のため家畜や器具類を供給せしめた。しかもなほかつ、その施政下に農民が如何に愉快なる生活を送つてゐたかは、『資本論』の著者が吾々に指摘してくれたやうに、フリードリッヒ二世の崇拜者たるミラボー自身の次の叙述によつても知られる。——「夏季には、彼等はガリー船の奴隸の如くに耕作や收穫の勞働をする。九時に寝ね二時に起きて勞働に従事する。冬季には、大いに休息して力を恢復せねばならぬのだが、租税の財源を得るために作物を販賣するのほかに無き時は、食用並びに播種用の穀物は毫も残らぬことになるから、この不足を補ふために勢ひ紡績勞働に従事せねばならなくなつて来る。彼等はこの勞働に最大の努力を向けねばならぬ。斯くして彼等は、冬季には深夜又は午前一時に寝て、五時又は六時に起きるか、又は九時に寝て二時に起きるといふやうな状態に置かれる。而もこれは日曜を除くほか、毎日行はれる所である。

る。斯かる過度の不眠と勞働とは人間の性質を消耗し去り、農村の男女は都會の男女に比して遙かに早く老い込むといふ結果を來たすのである。」<sup>(3)</sup>

フランスにおける農民の生活状態は到底それどころではなかつた。舊封建社會を粉碎した一七八九年のフランス革命は、てふどロシアにおけるプロレタリア革命がなしたとげたやうに、叛逆したる貴族及び僧侶の廣大なる所有地を收奪し、それを細分して農民に與へた。こゝからして零細地を所有する自由農民がその數を増し、フランスはつひに、今日知らるゝ通りの零細地所有制度の一典型國となるに至つたのである。ところで、農民の幸福が事實その「所有と結びつく」ものであるならば、何代にもわたる農民の血と汗によつて漸くにして獲得せられ・維持せられて來たこの零細地の所有制度こそ、フランスの農民に無上の樂園を約束せねばならぬ筈であつた。が事實はどうであつたか？ 先づ大革命の百年前ラブリユール(Labruyère)の

なしたフランス農民の描寫は有名である。曰く「眞黒で瘠せこけた、そして日に焼けた人間面をした一種の動物、男と女がある。彼等は土地の上に住んで居り、土地に縛り付けられ、その土地を打ち勝ち難い忍耐を以つてほぢくり返してゐる。彼等ははつきりした聲の様なものを持つて居り、立ち上る時は人間らしい顔を示す。事實之は人間であつて、彼等は夜に洞窟に歸りそこで黒パンや草木の根や水で生きてゐる。」<sup>(4)</sup>と。くだつて一八七四年のリーブクネヒトの叙述はかう語つてゐる。——「フランスの農民がどういふ生活をしてゐるかは、一八五一年の國勢調査の統計から取つた次の數字を見ればこれを推測することが出来る。即ち三十四萬六千戸の農家には戸口以外には窓といふものが全然なく、また約二百萬戸の農家には窓が唯一つあつたに過ぎなかつた！而もこれらの住居には多數の家族と一緒に押し込まれて居、兩親が既婚の息子の家族と一緒に居ることを考慮すると、フランスの小農の殆ん

ど半分が、古代の穴居民族と雖も恐らくは羨望しないやうな穴の中——生活の便宜も健康も體面も全然かまつてゐられない上に、家庭生活をも不可能ならしめる穴の中で暮してゐる！と云ふ結論に吾々は到達するのである。」<sup>(5)</sup>

事情はこの世紀の終りに近づいても同じだつた。カウツキーの記すところによれば、八〇年代の初頭のイギリスの一觀察者は、フランスの農民が送つてゐる以上の悲惨な生活を考へることは出来ない、と言明してゐる。彼等の家屋はまこと豚小屋の名にふさはしかつた。フランスの農家は次ぎのやうに描かれてゐる——「窓は一つもなかつた。入口の上に窓ガラスが二枚、それも開けることは出来なかつた。入口が開いてゐないと、光線も空氣も入らないのだつた。室の隅の隅も、斜面机も、戸棚も見られず、床の上には球葱や不潔な着物やパンや袋や名狀し難い屑の堆積が横はつてゐた。夜になると殆んどいつも、男、女、子供、家畜

が雜魚寢をした。そしてかうした慰安の缺乏は必ずしも貧困から起つたものではなく、人々は概してなりふりを構はうといふ氣を全然失つて居り、ひたすら薪の儉約のことだけを考へてゐた。<sup>6)</sup>

これらの事實に照して見れば、前に掲げたシスモンデイの樂園は決して當時の、一般的な農民の生活狀態の正しい描寫でなかつたことは明かである。そればかりではない。シスモンデイは説いてイタリア・ギリシヤの歴史が吾々に、その農民幸福の姿を示してゐると云ふけれども、私の讀みとつた古代諸國の經濟史は不幸にもその正確なる反對をしか物語つてゐない。尤もシスモンデイが、謂ふところの「イタリア・ギリシヤの歴史」をもつていつの年代を意味せしめてゐるかは右の叙述において明かでないが、一般に理解される東南ヨーロッパの古代歴史はその全體を通じて、農民の壓迫・搾取・隸屬の苛酷なる支配過程をしか吾々に傳へない。例をイタリアの古代史にとつて、「農村の幸福」

がまさに如何なる「姿」をとつてゐたかを瞥見しよう。

1) Simonde de Sismondi, Études sur l'économie politique, t. 1. p. 170—171.

2) K. Kautsky, Die Agrarfrage, Stuttgart 1899, S. 8. フォンタリヤ科學研究所譯『農業問題』鐵塔書院刊、上二〇—一一頁。

3) Mirabeau, De la Monarchie Prussienne, Londres 1788, t. iii. p. 212 sq. Zit. nach K. Marx, Das Kapital, Engels Ausgabe, I. Bd. S. 698. 高島譯『資本論』新潮社版第一卷九八四—九八五頁、改造社版一の七二七—七二八頁。

4) Zit. nach Kautsky, Die Agrarfrage, S. 25. 前掲邦譯『農業問題』上、三九—四〇頁。

5) W. Liebknecht, Zur Grund- und Bodenfrage, Leipzig 1. Aufl. 1874; 2. Aufl. 1876. 河西太一郎譯『土地問題論』一三四頁。

6) Zit. nach Kautsky, Die Agrarfrage, S. 108—109. 前掲邦譯書、上、一七九頁。

## 二、ローマ史上における農民生活

イタリアは早くからその南端において先進ギリシヤ

の支配と影響を受けたが、その最も早く開けた地方はむしろ中部であつて、この地方をラティウム (Latium) と稱した。この地方こそは後にローマの覇權が打ち樹てらるゝ根原となつたものであるが、そのローマ人の始祖がこゝに初めて移り住んだ頃は、古代ギリシア人よりも・また古代ゲルマン民族よりも遙かに進んだ文化段階にあつた。即ちその歴史の發足點は、狩獵でもなく遊牧でもなくして、彼等はすでに一段と高い農耕を知つてゐたのである。ところで當時ラティウムの住民が如何なる仕方で農耕を行つてゐたかはもとより今日なんびとも明確に推測し得ないが、大體において疑ひのないところは、古代ゲルマン民族とほぼ同様に一種の共同耕作を行つてゐたことである。土地の所有は個人に屬せず、耕作地と定められた土地部分 (マルク) は、氏族を基礎として構成された村落の全員に分割してその利用に委ねられた。後に成立したローマの法典において、個人の財産が初めは家畜と土地の利用とか

ら成立つてゐた事實に徴しても、土地が個人の所有として市民 (國民) に配屬されたのは、づつと後の事であることがわかる。

最初許されてゐた土地の利用が、何故に・また如何にして個人の所有にまで遷移して行つたかは、こゝで説かるべき問題ではない。いま吾々にとつて興味ある問題は、かくて一旦成立した土地所有制のもとにおいて農民が如何に愉快なる生活を送つたかである。この場合吾々が先づ念頭に置かねばならぬことは、その初めわづかにラティウムの一村落到過ぎなかつたローマが、その地位の形勝に基づいて特殊なる發展を遂げ、他の群小村落を凌駕して、つひには全ラティウムを支配するに至つた事情である。事こゝに到れば、ローマの市民はもはや農耕に従事せず・またするを要せず、彼等の主たる事業は、第一には戦争、第二には貿易と金貨となつた。その間に群小村落の農民は何をしてゐたか、また何をさせられてゐたか？ 彼等にはた

しかに土地の所有が許されてゐた、またその相續も認められてゐた。彼等はたしかに「その子供達と共に全勞働を自分の小さな相續地で果す農民」、「自分の穀物を食べ・自分の葡萄酒を飲み・自分の栽培した麻と自分のとりあげた羊毛とを着る農民」であつたであらう。が彼等は土地の所有を獲得したその瞬間から——云ひかへれば、ローマの統一國家が成立して自由農民もまた國家の成員として市民權が賦與される一方、政權と資本とが首都ローマに集中累積さるゝに及んで、農民は「將來の期待で美化する」どころか、決して安如として「一定勞働の要求しないあらゆる瞬間を自分の子供のために、否、子々孫々のために費す」の境地にあるを得なかつた。土地所有權の確立はやがて大地所有者による小土地所有の收奪・驅逐となつて現はれ、統一國家の成立は同時に、農民よりする不斷の兵力と重税との徴發となつて現はれたのである。

當時の小農民が事實如何なる程度に、即ち如何なる

規模の經營を行ふてゐたかは定かでないが、農作物の種類が少なかつたことや耕作が一般に二圃農法であつたことなどを考へると、その生産物は以て彼等の家族を豊かに養ふに充分でなかつたことは推察するに難くない。がそれはともあれ、いま吾々にとつて重要なことは、それらの獨立小農民が事實において如何なる政治的・社會的・經濟的壓迫を受けてゐたか、また彼等は如何にしてこれらの壓迫下に、終局的にはローマ帝國そのものゝ滅亡にまで導いたところの没落過程を辿つて行つたかの問題である。この問題に對する回答は必ずしも史家の間に一致を見ない。私は今試みに一方の權威ルヨ・ブレンターノの記述に従ひ、次の三原因を掲げてこれを説かう。

一、貴族による共有地の收奪

二、過酷なる債務法を手段としての貴族による農民の隸屬化

三、不斷の戰爭にもとづく農民負擔の重壓

7) L. Brentano, Das Wirtschaftsleben der antiken Welt, Jena 1929, S. 97 ff.

I。まづ最初、土地の所有上における大小廣狹の差別は何に基づいて起つたかとたづねてみると、それに對して與へうる最初の説明は、共同耕地が分割して個人の所有に移さるゝ際に當然に起つたものと考へらるゝ大小廣狹の差別である。その際に作用した權勢の強弱は度外に置くとしても、家族の員數が異なるに應じて異なる面積の耕地が所屬したと見られねばならない。がこの説明は、大土地所有——わけても貴族による大土地所有の累進的增加に對しては不充分である。それには別の原因がなければならぬ。事實において大土地所有と大農經營とは、すでに紀元前三世紀の頃にイタリアでは廣く行はれてゐた。その主宰者は多く貴族であり、農業勞働に従事するものは主として外國から供給された奴隸であつた。ところでこれらの貴族が如何にして大土地所有者となつたかの説明は、吾々が

右に示した第一原因——貴族による共有地の收奪——によつて與へられるのである。

貴族による共有地の收奪は、もともと戰爭に關聯して起つた。前に云ふたやうに戰爭はローマ人にとつて最も利益の多い事業と考へられ、また彼等はそれを實行したが、軍世上重要な地位を占めた貴族たちは常に虎視眈々として、新しく占領されゆく土地を狙つた。當時はどの地方においても、村落の成員に耕作用として委ねられる土地の外に、國王の直領地として私人の手を觸れ得ざる土地部分が區劃して殘されてあり、最初は國王が自己のためにこゝで家畜を飼はしめるか、或は一定の貢納を條件として臣下に貸與するを慣としたが、戰勝によつてかういふ土地部分が殖えるに従ひ、貴族たちは、最初はこれを國王に代つて占有し、さうしていつの間にか自己の所有に移してしまふ。奴隸を使役してはこれを自己のために耕作させ、續いてはその隣接の土地を小農民から、時には合意の上・時



には暴力をもつて收奪し、自己の土地に併呑してしまふ。——謂ゆる原始的蓄積！がこの收奪過程はこれに止まらなかつた。それはつひに、農民が牧畜用として留保して置いた共有地 *Allmend* にまで及び、農民はその生存をます／＼脅かさるゝに至つたのである。

II。貴族による共有地の收奪と並んで、斷えず農民を塗炭の苦しみ陥れたものは當時の、債務に關する苛酷なる法律であつた。貴族と庶民とは、そこでは全く異なる法律をもつて遇せられた。どの民族においても原始状態のもとでは、同じ種族のものに對しては利子をとらないことを命じ、外國人に對してはこれを許すを常とした。その最も代表的なものは周知の如くユダヤ人であつたが、いまローマにおいては、貴族と庶民とはこの點については異なる種族に屬するものゝやうに考へられた。即ち貴族同志の間では利子とはとるべからず、但し庶民に對してはとりうべしと定められてあつた。農民たちは生活の困難からか或は凶作のため

に、貴族から高い利子の金を借りた。が、借りたが最後、農民の所有地もからだも全く貴族の自由意思に委ねらるゝの外なき状態となつた。土地が沒收されることは云ふまでもなく、身柄は奴隸として處分されたのである。

これは何年も續いた、つひに農民の叛亂が起るまで。時は紀元前四九五年、ローマが外敵と矛を交へねばならなかつたとき、永年怨恨を鬱積し來つた農民たちは結束してその徴兵を拒絶した。ローマ史上における農民最初のゼネラル・ストライキ！（日本は明治六年の徴兵令で之を経験した。）驚いたのは執政官のブリウス・セルヴィリウス (*Publius Servilius*) である。彼れは言葉巧みに農民に説いて債務法は當分中止すべきこと、及び負債のため禁束されてゐる農民は直ちにこれを釋放すべきことを約した。農民たちが喜び勇んで戦場に出でたのは無論である。戦は勝つた、農民は凱旋して故郷に歸つた。がその歸りを待つてゐたもの

は、約束された自由ではなくして牢獄であつた。歸るとすぐに彼等は再び元の債務者として、手を縛られて牢獄に投ぜられたのである。次の年にはまた戦争が起つた。農民たちは頑強に抵抗してその招集に應じないやうに見えたが、今度は執政官マニウス・ヴァレリウス (Manius Valerius) が國民の信望厚き家柄の出であるところから、その新たな口約を信賴してつひに再び命令に服するに至つた。勝利は再びローマ人の側にあつた。ところが兵士たちが凱旋して歸ると、元老院はまた前の口約を破つた。従軍した農民たちは今度は肯かなかつた。隊伍堂々と反旗をひるがへしティバー (Tiber) とアニオ (Anio) 川の間の高地を占領し、こゝに據を据ゑて新しき平民都市を建立するに至つた。事に到れば、さすがの元老院も狼狽した、さうして遂に讓歩して農民の要求を容れた。かくて惡法たる債務法が完全に撤廢され、農民が自由を保證されるに至つたのは、紀元前三二四年のことである。が、それも

永くは續きえなかつた、農民を苦しめる新たな事情が待ち構へてゐた。それは前に掲げた第三原因——不斷の戦争による公課負擔のより大なる重壓に外ならぬ。

III。ローマにおいては、すべての自由市民は同時に守備者であつた。都市が小さく、また戦争が小規模であつた間は、それで間に合ふた。がローマの國家が膨脹し戦争が大仕掛となるに及び、事情は一變した。出征した農民たちは何年も、時には何十年も故郷には歸れなかつた。尤も彼等は、凱旋の場合には分捕品の分け前を貰ふた。が、それを貰ふて故郷に歸つてみると家は朽ち、田畑は喪はれ、屢々、住ふべき場所さへ見出されぬことがあつた。こゝにおいてアツピウス・クラウディウス (Appius Claudius) は、いたくこれを慨して、共有地よりの收穫をもつてこれらの歸還兵を養ふべきことを提唱した。が共有地はその時遅く、すでに貴族たちによつて收奪されてゐた。かくて歸還兵を養

ふために訴へられた方法は、つひに現業の農民に對する更に重い課税となつて現はれたのである。

度重なる戦争により、また今は新たな重税の負擔によつて二重にも三重にも苦しめられた農民の窮狀は實に差迫つて、紀元前第二世紀にはその極地に達した。農村には、いづこにも怨嗟の聲が満ち溢れた。農民たちは永い戰場から無產者として歸つた。エトルリア地方では紀元前一三四年に、自由農民は殆んど全くその跡を絶つたと云はれてゐる。ローマの廣場でティベリウス・グラツカス (Tiberius Gracchus) が、家を失ひ田畑を喪ふて農村より群がり來る窮民を前に慨世の熱辯を振ふたのは、まさにこの時である。その一節に曰く——「イタリアをさまよふ<sup>い</sup>けものは穴をもつてゐる、どの一匹のけものにも、棲ふべき場所とふしどがある。たゞ、イタリアのために戦ひ・イタリアのために死するものは、空氣と光りと<sup>い</sup>のほかは何ものをも有つてゐない。居所不定、家もなく住ひもなくして彼等

は、妻をたづさへ子を伴ふて地上をさまよふてゐる。權勢ある將軍たちは、自己の墳墓と殿堂のために敵と戦ふ場合には、欺いて兵士たちを戰場におくる。たゞの一人も、家には祖先の祭壇をもたず、たゞの一人も——しかり、かくも多數のローマ人のだれもが、その先祖の墓所をもたないのだ。他人の貪慾のために、他人の致富のために、彼等は戦ひ、彼等は死する。彼等こそは世界の王者なるに、しかもたゞ一塊の土くれさへ自己のものとは呼び得ない」と。

叙べてこゝに到れば、讀者は當然に、餘りにもかけ離れたるシスモンデイの樂園を想ひ合はさるゝであらう。「農村の幸福——その姿をイタリア・ギリシアの歴史が吾々に示してゐる」？ その歴史は、實は吾々に、憐れむべき農民の苛虐の歴史をしか示してゐないのである。

### 三、恐慌裡における日本の農村と農民

かく考へて見ると、シスモンデイにおける農村の樂園が決して、正しい農民の一般的状態の描寫でなかつたことは明かである。彼れの眼中に置かれたものは、當時におけるほんの僅かな地方にすぎなかつた、さうして彼れはこの状態をもつて自からの理想としたのである。かつてミリュートインの云ふた言葉に——「フイジオクラアト以來古典學派は一般に大經營の優越を認め、これを小經營よりも上位に置く。ところが前世紀の中頃以來この派の理論に變革が始まるのである。即ち、ブルジョアの理論は自作農民の味方となる。」<sup>(8)</sup>——といふのがあるが、吾々のシスモンデイはたしかに、この傾向の一人の有力なる先驅的代表者であつたのである。それはしかし、いま吾々が追究しようとするところではない。反對に吾々はカウツキーと共に、

シスモンデイにおける樂園をもつて、「ともあれそれは決して考へ出されたものではなく、鋭い觀察者が自然に即して描きえた眞實の姿であつた」<sup>(9)</sup>と解しよう。事實、限られたる狭い地方においては、かやうに幸福なる農民の生活状態も存したであらう、さうしてこの農民の生活状態はやがて將來の農村のすべてに約束するものとも見えたであらう。が、農村のこの樂園・シスモンデイのこの理想はいつまで續きえたか？ 吾々は試みに問ふてみる——「農民的土地所有の存するところどこにでも、かの幸福・かの確固さ・將來に對するかの信頼・かの獨立性は見受けられ、それは同時に幸福と青春とを保證」したか？「農民は決して商業恐慌によつて破滅することがな」かつたか？ 彼等は果して「將來を危惧するどころか、將來の期待で美化」し得たか？

——眼を轉じて百年後の日本に移せば、その農村、しかり「農民的土地所有」の保證されてゐる現下日本

の農村は、いかにも活々、次の一聯の事實によつて、シスモンデイの精彩ある「農村の幸福」に答へてゐる！

(一) 農家戸數の漸減。——日本内地の農家戸數は明治三十一年には四百二十九萬戸、總戸數に對する割合は六六・一%であつたが、同四十三年には六〇・三%、大正十一年には五〇・八%となり、昭和五年には四六・四%となつた。總人口のうち農村人口の占むる割合はこれに應じて漸減し、三十年前には全國民の凡そ七割を占めたものが今日では五割以下(四八%)となつてゐるのである。實數の上においても農家戸數の増加は明治三十七年頃から殆んど停滯して居り、その年に五百四十一萬七千戸であつた農家戸數は、十九年後の大正十二年には五百四十四萬戸、さらに七年後の昭和五年には五百五十九萬九千戸となつたにすぎず、依然として五百四、五十萬臺を上下してゐるのであつて、その數はこの四分の一世紀間殆んど固定してゐるとさへ

云ふことが出来る<sup>(10)</sup>。それらはすべて農村人口の相對的減少を示すのであるが、絶對的にも農家戸數が減少してゐる縣下がある。例へば、千葉縣では大正十四年から昭和三年に至る四年間に六千戸を減じ、山梨縣では昭和二年から三年にかけての一年間に四千戸を減じ、兵庫縣では昭和四年に終る十年間に丁度一萬戸の農家が減少した<sup>(11)</sup>。——この事實は何を物語るか。一面においては商工都市の繁榮が農村人口を吸収したと解せられよう。が他面においてそれは、農村經濟の不如意、農民生活の累積的困窮化に對する一の確證である。

(二) 中農層の没落。——中小地主・自作農民こそは常に一國の中堅層を構成するものとして重視せられ、シスモンデイまたそれら獨立農民の生活狀態を讚美したのであつたが、事實において彼等はどういふ運命を辿つてゐるか。全農家の推移過程のうち最も隱慘なる結果を示してゐるのはこの中農層たる自作農家であつ

て、明治四十一年には百七十九萬戸、農家總數に對して三三・三％であつたものが、昭和五年には百七十四萬戸、農家總數に對して三一・一％の割合となつた。

自作農家はまさに、絶對的にも減少しつゝあるのである。轉じて耕作地所有の反別上から見ると、十町歩以上の大地主が著しく増加してゐるに反し、三町乃至十町歩の中地主はその數において減少しつゝある。即ち三町以上五町未満のものは二十七萬九千戸（明治四十一年）から二十二萬五千戸（昭和五年）に著減し、五町以上十町未満のものは同じ期間に十二萬三千戸から十一萬三千戸に減じた<sup>(12)</sup>。中農層のこの顯はなる没落過程は、別の機會で明かにするやうに、一面においては大地所有者への土地の集中、他面においては小作乃至自小作農民の増加を意味するのであつて、農業恐慌は更にこの勢ひを加速化し、ますます農民社會の分裂を激しからしめるの作用をなすものである。現に岡山縣下では土地價格が暴落してゐるに拘らず、土地

賣買が尠なからず行はれてゐる。これは中小地主が遂にもちこたへ得なくなつてその持地を手離すことを證するのである。福岡縣からも同様の情報が傳へられ、自作農又は小地主が最も困窮してゐると云ふ<sup>(13)</sup>。

(三) 農民負債の累増。——周知の通り、昭和五年帝國農會が調査發表したところでは、農家負債の總額四十億圓を超ゆるとせられ、翌六年の初頭農林省當局が帝國議會で發表したところでは五十億圓に達すると推定された。これを大正元年大藏省が調査した當時の七億五千萬圓に比すると、それ以來十九年間に四十二億、毎年二億二千萬圓宛増加したことになる。農家の負債總額五十億と云へば大正十二年の關東大震災による損害額と等しく、また日本の國債總額（昭和六年末現在六十億二百八十萬圓）にほぼ匹敵する巨額であつて、これを全國五百五十萬戸の農家に割當てると一戸當り九百圓の負債となる。内地府縣のうちで最も悪い状態を示してゐるものゝ一つは新潟縣で、その農家

負債は一戸當り平均二千五十九圓に達すると報ぜられた。北海道もまたこの點では全國的水準を遙かに抜き、昭和六年六月北海道廳が道内優良農村四部落二百戸の農家についての調査を概報したところでは、一戸當り平均負債額一千二、三百圓であつて、これを全道十九萬戸の農家が負ふものとせば、その總額二億圓を突破する<sup>(14)</sup>。(因みに昭和四年六月の道農會の調査では一戸當り負債額五百圓足らずとせられてゐた、従つてそれ以來およそ一年九ヶ月の間に二倍半に激増したわけである。) なほ道廳農産課は極く最近、かねてより調査中の全道農家負債の集計を了し、總額二億九百九十六萬三千百十四圓、一戸當り平均千九十三圓と確報したが<sup>(15)</sup>、その負債内譯は内地府縣の場合とは異なり生活費の不足よりも多く土地購入費及び經營費の調達にあることを示してをるとはいへ、北海道農家が一般的に内地府縣の農家よりもより大なる債務の重壓下に呻吟しつゝあることは明瞭である。

以上の三點は何れも、日本農村の漸進的疲弊と農民生活の累積的窮迫とを示す基本的・一般的な事實である。もし夫れ恐慌裡における日本農民生活の窮狀に到つては、いかに偷安の夢を貪らんとする者と雖もこれを正視するを得ざる程度にまで達してゐる。昭和六年農業恐慌の第二年を迎へるや、農村の食糧不足、農村窮民の激増、缺食兒童の増加、貨幣流通の停止等々、農村苦悶の徴候がますます一般的、且つ深刻となり、高知縣のある地方の如き、そこでは野生の狐の、かみそりの球が食用に供されるといふ、文字通りの、人間生活の廢棄——動物生活への墜落さへ報ぜられた<sup>(16)</sup>。だが、事態は昭和七年に至つて一層惡化し、つひに全國各地よりの農民代表が臨時議會を目掛けて陸續、帝都に殺到するまでに進展した。「火の手」は農村に昂つたのである。これと前後して農林省はこの「恐るべき現實」に對し「根本的な對策を樹立」するの準備として、長野、岩手、新潟、兵庫の四縣に「調査隊」を派

遣する一方、全國各道府縣當局に命じて「農民の窮狀を直に報告」せしめたが、後者の諸報告は次の通りに概括されてゐる<sup>(17)</sup>。

一、蠶種代、肥料代の支拂に困難を極めてゐる。  
一、繭絲價の暴落によつて前途を悲觀し、乾繭貯藏をするものが激減して、成行任せに投賣してゐるもの續出の有様である。

一、繭代金の回收不可能に陥つてゐる。  
一、特約組合が特約組合成立に際し前渡金を要求してゐる。  
一、繭代金を目當てとせる金融並びに物品貸付を漸次停止しつつあり。

一、製紙工場の休業により職工たる農村女子の失業續出し收入皆無なるもの續出しつつあり。

一、公租公課の滞納甚し。

一、水田を桑園としたるものは繭價暴落により桑樹を拔取り水田になしつゝあるもの續出。

一、小學校教員その他公務員に對し寄附を強要するため教員は事實上の減俸となり、又は租税の滞納により教員その他公務員に對し給料不拂となりたる町村漸増の形勢にある。

一、食料品その他の日用必需品を物々交換に求めつつある事

實あり。

一、電燈料不拂から送電中止續出しつつあり。

一、醫療支拂ひ不能のため鶏兎鶏卵等を代償としつつあり。

一、農村子弟の休校するもの續出の有様なり。

一、負債償還困難なる所から農村の負債ますます増加しつつあり。

一、全國平均にして農家の負債は一戸當り百圓當り増加しつつあり。

他方、前記四縣下に派遣された農林省調査隊は、六月六日午前七時「いづれも悲痛な心を抱いて」歸廳した。その歸來談は當時の諸新聞を賑したが、これは江湖に知れわたつた記事であるとはいへ、またと得がたい資料になると思ふので、次にその一部を掲げておかう。

「今更、農村の悲況を聞かせてくれなんて農村の人に頼んだらなぐられるでせう——と、長野縣に派遣された隊員は報告書をまとめながら語る——窮乏を通り越してもがきにもがいてゐる町村がザラにあるんです。この一月頃からこの地方の農村では米、砂糖、醬油、鹽、味噌のこそ泥が盛んで警察でも取締りに困つてゐます。上田市でさへ物々交換が行はれて



農村には五十錢銀貨だつて見るのに困難です。農民も商人も物と物で商取引が行はれて、豆腐も作れば醬油も作り、自給自足です。食物は麥を食つてゐるのはいい方で、山の木の實は争つてとるので、果實のなる木はどんなものでも坊主にされてゐます。」

新潟縣についてはかうだ——「現在では賣る米は大農以外は一粒だつてない、それがため、生活費を作るために娘を賣る、その娘も年頃の娘が少くなつて小學校へ行つてゐる女子供を賣る傾向が増えてきたといふことです。子供の値段は尋常三年生位で百圓、卒業したもので四百圓、お話以上です。火災保険金をほしいたため放火するものや、こそ泥は公然と行はれる始末、醬油を使ふ農民はほとんどない。ひどいのは北蒲原、中蒲原、魚沼郡で肥料に使用する乾いわしやあは麥などが常食です。」

さらに岩手縣についてはかう報ぜられてゐる——「ぶちのめされたといった感じです。稗貫郡太田村の小作人の生計簿を見ると、六年度は百三十圓の收入で三百六十六圓の赤字です、この赤字は借金で埋めてゐましたが、借金のできる方はよい方で貧農は女子供を賣つて埋めてゐます。氣の毒なのは私娼にやられる娘で、すぐ歸れるとだまされ三圓から十圓位の金で娘を盗まれるのです。小學校では飢食兒童に對して炊出をやる時などはつかみあつて傷だらけになつて握り飯を

奪ひ合つてゐました。醫者のない村が百餘ヶ町村もあつてニセ醫者が流行し、それでもこのニセ醫者のために病氣を退治してもらつてゐるので農民は感謝してゐます。ワラビの根は上等な食物でそれすらもなくなつて、今では肥料の豆粕を煮て草をまぜてつゆを馬にやり、カスを食つてゐます。某村では小學校教員の俸給不拂からゴタ／＼が絶えず、着物はまつたく着たまゝでボロ／＼の雑巾着物で板の上にわらにくるまつて寝てゐます。實際、恐ろしいやうな眞ッ黒い感情が流れてゐて、東京まで問題を持つてゆくのは最後の手段でせう。」<sup>(18)</sup>

これとほゞ時を同うして文部省は係員を各方面に出張、農漁村飢食兒童數の調査を行はしめた。その報告によれば、北海道一萬八百九十九名、青森縣六千七百七名、秋田縣九百九十六名、岩手縣三千五百三十九名、この合計二萬一千百四十一名といふ驚くべき數に達してゐる。長野、新潟、群馬の諸縣もほゞ同様な情勢にあり、かくて當局の推定では「現在すでに全國飢食兒童二十萬を突破し未曾有の悲しむべき現況にある。」<sup>(19)</sup> わけても慘たるは沖繩縣下の學童だ。「同縣下百四十

一小學校の在籍兒童は、尋常科高等科合せて十一萬千  
百九十九名（六月一日現在）であるが、そのうち九十  
三パーセント九萬四千百十五名は、缺食兒童として學  
校給食を施して居り、百名中完全に食事をとれるもの  
はタツタ七名で、他府縣の缺食兒童とは少し趣を異に  
し、米はもちろん芋さへ完全に食へず、蘇鐵の實を食  
つてゐる悲惨な有様」が報ぜられた<sup>(20)</sup>。

- 8) W. P. Miljutin, Sozialismus und Landwirtschaft, 1920. 河  
西太一郎譯『社會主義と農業問題』同人社刊、九頁。
- 9) Kautsky, Die Agrarfrage, S. 8. 前掲邦譯書、上、一一頁。
- 10) 『明治大正國勢總覽』及び『第五十回帝國統計年鑑』に據  
る。
- 11) 原祐三著『現代農村の解剖』昭和六年刊、五一六頁參  
照。
- 12) 『明治大正國勢總覽』及び『第七次農林省統計報告書』に  
據る。
- 13) 松村勝治郎稿『農村窮乏に關する多少の考察』（社會政  
策時報、一三〇號、昭和六年七月發行）一三頁。
- 14) 『東京朝日』昭和六年六月廿八日、北海樺太版所報。
- 15) 『東京朝日』昭和七年八月廿一日、北海樺太版所報。

- 16) 松村勝治郎稿『農村窮乏に關する多少の考察』前掲、一  
〇一—一三頁參照。
- 17) 『小樽新聞』昭和七年六月十日所報。
- 18) 『東京朝日』昭和七年六月七日所報。
- 19) 『東京朝日』昭和七年七月廿八日所報。
- 20) 『東京朝日』昭和七年七月卅一日所報。

#### 四、農民の思想は急轉回する

以上掲げた農民窮乏の諸徴候——それらは、手を拱  
いて傍觀すべく餘りに悲惨なる、餘りに差迫つた事實  
ではないか？ 約せられたるシスモンデイの「農村の  
幸福」は、いまや惡魔の笑嘲にまで變つた。農民的土  
地所有は「幸福と青春とを保證」する代りに、背負  
ひ切れないほど高額の負債を「保證」する反對物にま  
で轉化した。「決して商業恐慌によつて破滅すること  
がない」筈であつた農民は、みづから欲すると欲せざ  
るとに拘らず徐々に相率ゐてそれと結び合はされざる  
を得ざるに至つた資本主義的市場——資本主義體制を

通じて、今や考へうる限りの窮乏裡に陥れられ、人間生活を廢棄して「狐のかみそり」「わらび」「蠶のさなぎ」「ふすま」、はては肥料用の「豆粕」に、やつと命をつなぐ事實上の動物生活にまで追ひやらるゝに至つたのである。

事態はまさに、ローマ末期における農村事情を彷彿せしめるものがある。帝政時代におけるロシア農民あの戦慄すべき窮狀も、日本における如上の事實を知るものには決して驚きとはならぬであらう。イスクラ時代にレーニンは書いた——「改革」「一八六一年の農奴解放を云ふ」後、まる四十年といふものは、かういふ『農民退質』〔農民であつたものが農民でなくなる〕の不斷の一過程、苦痛に充ちた徐々たる農民滅亡の過程を成してゐる。農民は悲慘な生活水準に引下げられた。即ち農民は家畜と一緒に住み、ポロを纏ひ、雜草を食つてゐた。何處かへ逃亡できたときには、自分の分有地から逃げ出した。収入よりも出費の方が嵩む自分の

分有地を引受けてくれる人に對して金を支拂つてまでも分有地から足を洗つたのである。農民は慢性的に飢え、屢々襲つてくる凶作のときには、飢餓と疫病とで幾萬となく斃れた。<sup>(21)</sup>——それが書かれて後三十年、はしなくも今吾々は日本の農村に、これと酷似の現象を見るのである。

「將來を危惧するどころか、將來の期待で美化する」？ さうだ、シスモンディには確かに明があつた。農民はもはや「將來を危惧」しない、彼等はもはや一步をも後退しえないところの・最後の窮地にまで押しやられてゐるからである。それどころか彼等は、「將來の期待で」滿されてさへゐる。——「永いあひだ日本資本主義」帝國主義の最大の搾取源泉であつた農業及び農民は、今やその反對物に轉化した」と、猪俣津南雄氏は云ふてゐる、「日本農業は、日本資本主義の發展に役立つものではなくなつた。そして却つてその『没落への轉向』を促進する要因に轉化した。曾つての役立ち

が大なりしだけそれだけ、この轉化の意義は重大である。日本農民は、もはや昨日の奴隸ではあり得ない。昨日の奴隸が従順であつただけそれだけ、この轉化の意義は重大である。<sup>(23)</sup>

と云へばとて讀者は、これをもつて一部論者の、爲めになさんとする偏矯の觀察と解されてはならぬ。絶望的な苦悶と窮境のうちから農民自身が何を感じ、何を考へつゝあるか、を併せ見られねばならない。「俺達の前途は暗澹としてゐる。……だが重いドン詰りの空氣は、素つ裸にされた農村プロレタリアにはつきりした一つの方向を示してはゐないか。そしてそれを見極める眼が穢い暗い蠶室の中で疲れた表情の底から見開かれてはゐないか。」<sup>(23)</sup>と農村青年の一人が『手記』すれば、他の一人はこれに應じたやうに「——俺はふと考へる。生活のためにする俺ら農民の仕事は、その報酬を横合ひから奪られるのではないか。辛苦をなめ骨身を削つて働らいても食へないのは、そのためぢや

ないか。恰度、この待ち設けられた『網』にひつかゝる鴨のやうに……俺らはよく考へねばならぬ。」<sup>(24)</sup>と云ふ。さうして最後に、第三の一人は斷乎として云ひ切つてゐる——「だが農民だとして何時迄も善良でゐはしない。この頃百姓の頭はぐれて來た。その顔には殺氣が漲つてゐる。誰も彼も自棄的に圖々しくなつた。……捨身になつた百姓は何者をも恐れない。……其處に彼等は初めて百姓の強さを發見して生き返つた。理屈はない。生きんがためには手段を選ばずだ。」<sup>(25)</sup>

事態がかうまで進んで來ると、「將來を危惧する」ものは、もはや農民自身ではない。最後の窮地にまで押しやられて、彼等は初めて「百姓の強さを發見して生き返つた」といふのである。農民の思想は急轉回する！「米をよこせ」「資金を農村にかへせ」といふ、「請願」ではなくて要求が、怒號が、どの村をも嵐のやうに旋回する。そして終に、——「永い永い間ふみにじられ、捨てられ、背かれて來た」日本農村、「五百五十萬

戸三千萬大衆よりなる日本農民」こそは、「日本更生の歴史創造の原動力たらしめんとして時代が日本のために用意しておいた新興群」であること、進みては「資本主義的に發達し資本主義的に支配せんとする都市を亡ぼすものは資本主義的に破壊さるゝ所の農村そのものに外ならない」——といふ新農本主義イデオロギーさへ確立さるゝに至つたのである<sup>(26)</sup>。日本資本主義は今やその根底から動搖を始めたと言はねばならない。

21) W. I. Lenin, *Samliche Werke*, Bd. IV, 1. Halbbd. S. 114

—115. 荒川實藏譯『農村問題』(改造文庫本) 10—1  
一頁。傍點引用者。

22) 猪俣津南雄稿『農業恐慌と日本資本主義』(改造、昭和六年一月號) 九九頁。

23) 『農村生活者の手記』(中央公論、昭和五年十月號所載)  
一八四—一五頁。

24) 『農村生活者の手記』同上、一九〇頁。

25) 『農村生活者の手記』同上、一九三頁。

26) 橋孝三郎著『農村學・前篇』(昭和六年刊) 又は『農業本質論』(昭和七年刊)を見よ。

失はれたる農村の樂園

## 五、農民の窮乏過程と其の 分析の方向

以上吾々はやゝ長く、失はれたるシスモンデイの農村の樂園——恐慌裡の日本農村と農民との眞實の姿を描寫し、併せてそれが如何に差迫つた情勢にあるかを縷述した。次いで果さるべき吾々の仕事は當然に、この農民の窮乏過程の科學的分析であらねばならぬ。農民の窮乏化は如何なる社會的・經濟的機構のもとに進行し來たつたか、またその將來の見透しはどうであるか、一言にして窮乏農村はいづこより來りていづこに行かんとするか、の究明は、いま吾々に課せられたる焦眉の問題である。この問題に對して先づ明確なる回答を與へることなくしては、いかなる農村對策・農民對策も根柢より樹立するを得ないであらう。云ふまでもなく農民の窮乏化は、時代により國によつて種々異なる原因と様相とを保有した。ある時代にはより多く政

治的權力が、他の時代にはより多く經濟的關係が作用した。吾々がいま眼前に見るところの農民の窮乏化は、もとよりそこに偶發的・移行的・個人的な若干要素がはたらきつゝあるとはいへ、根柢的には現經濟體制内にその恒久的・全般的な原因を包藏してゐる。即ち農業はそれ自體、今日の資本主義的社會體制内の・切り離しがたい一環となり、斷えずこれによつて脅かされ・あやつられ・搾取されてゐるのである。——おもへば農民の歴史は窮乏の歴史である。が、農業の歴史はまた、あらゆる時代のもとにおいて搾取の歴史であつた。この理は夙くに、農は國本なりと云ふた徳川時代の諸學者が知り盡してゐた。農は何故に國本であるか、それはその時代の支配階級を養ふたところの・唯一の搾取源泉であつたからである。徳川時代の政治家は故に云ふた——「胡麻の油と百姓は、絞れば絞るほど出るものなり。」<sup>1)</sup>と。農民の搾取については、おそらくこれほど露骨大膽な表現は他にあるまい。が、

社會秩序が封建主義から資本主義に移り行つても、被搾取體としての農業には依然變りがない。武家の支配が資本の支配に變るだけである。

〓 本多利明著『西域物語』卷下に掲げ批判する所。日本經濟叢書、第十二卷一八四頁。

資本主義社會における農民窮乏化の研究はそれ故に、この資本主義との關聯において行はれねばならぬ。この關聯を無視したる・分析の方向を誤つた・如何なる研究も、またかゝる研究に基づいて樹立された如何なる對策も、詮するところ何等の力をも持ち得ぬであらう。したがつて、たとへば農村における自給性の喪失が資本主義の進行過程に伴ふ不可避の出來事であつたとすれば、一部論者の如くいかに口を極めて農民に、喪はれたる自給性の恢復を説くとしても、資本主義の進行そのものが前提とされてをる以上は結局、この進行に逆行せんとする無謀の努力に歸しをはるであらうし、また日本農政諸學者が今尙ほ農村更生の唯

一の武器として固執する産業組合・共同組合主義も、中農自作農の轉落によつてその温床を根柢から揺がされながら、詮ずるところ農民社會の階級構成及びその動向を顧みざる空疎無力な自己の姿を、歴史的に不可避な事實の前に曝さねばならぬであらう。——吾々の研究はそれゆゑに、農業と資本主義との關係を常に眼中に置きながら、この關聯のもとにおいて農業従つて農民は、いかに急激に、又いかに徐々に、窮乏化の過程を逐はねばならぬかを示すに向けられねばならない。それが達せられてはじめて、農民窮乏過程の科學的分析がその任務を了へる、そしてそこから眞の意味における「農村更生」の道がおのづから拓けゆくのである。

——一九三一年九月稿・三二年八月訂——